

特 集

子どもと水

自転車世界一周と恩返しの水

坂本 達

西アフリカの様子

小学生の時から私の夢だった世界一周。二十六歳の時、会社を辞めずに四年三か月間かけて、自転車ですべて世界四十三か国、五万五千キロの旅に出ました。

世界一周中、最も気を使ったのが「水」。特に、開発途上国といわれる国々では、衛生面から生水は飲まない、果物は自分で皮をむく、食べ物は必ず火を通したものを食べるということを徹底しました。

病気になるとう自転車に乗ることができませんし、まともな医療施設がない場合、取り返しのつかないことになります。水は健康に生きるために最も大切なものでした。

多くの開発途上国では、女性や子どもが遠くの川や井戸から水を運んできて生活しています。しかしせっかく運んできたその水も、川や池が水源となっている場合、そこでトイレをして体を洗い、洗濯をします。抵抗や体力の弱い子どもたちが病氣

にかかり、最悪の場合死亡してしまいます。

私は毎年のように、西アフリカのギニア共和国に井戸掘りや診療所建設のために遠征してはいますが、この国の平均寿命が四十六歳と言われるのには、病気が原因で子どもたちの死亡率が高いという背景があります。家に常備薬があり、薬局や病院があり、電話があり、いざというときには救急車もある日本とは違い、薬も無く、衛生的な飲み水さえ入手できない国なのです。

一度、西アフリカで男の子が道端で、ウンチをしているのを目撃したのですが、ウンチをしている男の子のお尻から、お兄ちゃんが白くて長い寄生虫を引っ張り出していました。これも汚染された水や食べ物の原因です。私もアフリカで寄生虫を宿していたことがあります。体調も悪くなりつらいものです。病気や衛生に関する教育も大切ですが、それが実現できない環境があることも事実でした。

ギニアで発病

世界一周中、西アフリカのギニア共和国で、連日の暑さとハードな走行で私には疲れがたまっていました。明日は休息日にしよう、そう思いながら眠りについた翌日でした。

昼頃から体調が悪くなり、ひどい下痢が始まったのです。食欲がなく、悪寒がしていたので普通の下痢ではない気がしていました。そしてわずか一時間で、熱が一気に39・5度に。マラリアを発病させてしまったのです。翌朝、自分の便を確かめると、なんと、下痢に鮮血が混ざっていました。頭のとっぺんまで鳥肌が駆け上りました。赤痢も併発……。きちんと治療しないと命を落とす、水が原因の病気です。自分が二つの大病にかかった運命をのろっていました。

しかしその村にはドクターがいて、彼が「すぐに

治療しなければ助からない」と言って、村の最後の注射を私のために使ってくれたのでした。村の子どもを救うための大切な薬を、よそから来た私に使ってしまったのです。理解を越えた出来事でした。お陰で私は一命を取り留めたのです。

世界一周を終え、私はギニアのその村を七年ぶりに訪れました。命を救ってくれたドクター、食事を作り、血便の付いたパンツを洗ってくれるなど、献身的な看病をしてくれた村人たちにお礼を伝えるに。そして薬をお返しに。首都でマラリアの薬、寄生虫下し、抗生物質などを千錠単位で入手しました。村人たちは歓迎してくれ薬も喜んでくれました。しかし、最後に言われてしまったのです。「私たちにはもつと必要なものがあるのです。それはきれいで安全な水です。きれいな水があれば、子どもたちの病気も減るのです」。日本で当たり前に手に入る

ものがここには存在しないこと、そして、いつも自分だけ浄水器を使って安全な水を飲んでいただけを、後ろめたく思いました。

歓迎ムードが落ち着いたころ、日本から持つてきた七年前の写真を村人たちに渡しました。しかし、期待していたうれしそうな反応がありません。私は当時の写真を指さしながら「この人はどこ?」「この人は?」と七年ぶりの成長や変化を楽しんでいたのですが、一人の男の写真を指さしたところ、反応がありませんでした。どうしたのだろうか、と思っているとドクターが「彼は亡くなった」と言いました。私はまたしても日本の感覚でいたことにハッとしました。ドクターは続けて子どもを指さし、「この子も亡くなった」。さらに別の写真で、「君にご飯を作ったこの女性も亡くなったよ」と続けたのです。村人たちはひどく落ち込んだ様子でした。写真

を見ながら泣き崩れる女性もいました。命の恩人たちにお礼を伝えに行ったら、その人たちはもういなかったというのはショックなことでした。

「きれいな水を手に入れたい」

その思いを支援したい

世界一周から帰国後、世界中の経験やメッセージをフォトエッセイ『やった。』（三起商行 二〇〇一年）として出版しました（現在十四刷）。そしてその印税で、ギニアの人たちに恩返しをしようと決めました。ドクターと二年がかりで準備を進め、村にきれいな水を得る手段としての井戸を完成させました。村人たちが企画し、業者や資材を手配し、率先して労働力を提供して実現したのです。完成した時は、「子どもの感染症が減る」「村の歴史的な出来事だ」「日本ありがとう！」と、みんなが喜びました。特に、女性がうれしそうでした。

井戸掘りプロジェクトのとき、目に焼き付いているのは、子どもたちが建設にかかわっていた様子です。大きな子が小さな子たちをどこかへ連れて行っただと思っていると、しばらくして大勢の子たちが頭の上に砂利や石をいっぱいに入れたバケツを運んで戻ってきたのです。六歳ぐらいの子が「自分たちの井戸だ！」と言っていたのには感動しました。また、資材を運ぶトラックを村に通すため、子どもたちが木を切ったり石を掘り起こしたりして道を作っていました。一人ひとりがかわることできれいな



▲命の恩返しの井戸が完成

水が手に入る、世の中が変わる、という感動を一緒に味わったのです。

現在も、その井戸は村人たちが毎月お金を出し合って修理代や部品代として使えるようにし、水管理委員会がしっかりと維持管理を行っています。

井戸掘りの次に

現在、ドクターが住むギニア北西部のある地区には約七千人が住んでいます。病院も診療所も一つもありません。そこで、ドクターは自宅にビニールシートを張って仮設の診療所として治療を行っています。「まともな医療施設や薬があれば、もっと多くの子どもたちを救うことができる」と、ドクターや地域の人が立ち上がりました。井戸作りと同様です。応援したい、そう思われます。今年中に診療所が完成し、次は医者になりたいという学生の奨学金制度の設立を予定しています。

日本の子どもたちへ

現在、日本全国の学校を講演活動で回っています。ある小学校で「きれいな水がなかったらどうするか」という話題になったとき、子どもが「自動販売機で買う」「ジュースを飲む」と答えたことがありました。都会では井戸を知らない子どももいます。

一方で、子どもたちは日本のように生活できることが当たり前ではない、ということを理解します。そして、その世界に対して「自分たちにできることはないか」と自主的に話し合おうのです。日本の子どもたちには共感し、行動する力があります。水を通じて世界とつながります。

これからも私は一連の活動を通じて、水や命の大切さや、人と人とのかわり、さまざまな夢が実現するというメッセージを伝え続けたいと思っています。(株)ミキハウス勤務 早稲田大学客員教員